

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 3 号について

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 3 号を発表したので送付します。

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 3 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 穂いもち※	並	2
	2 紋枯病	並	2
	3 斑点米カメムシ類※	並	2
普通期水稲	1 葉いもち※	多	2
	2 ウンカ・ヨコバイ類※	並	3
	3 コブノメイガ	一	3
	4 スクミリンゴガイ※	多	3
野菜・工芸作物全般	1 アブラムシ類	並	3
	2 ハスモンヨトウ等チョウ目（鱗翅目）害虫	やや多	4
トマト	1 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	4
ウリ類	1 黄化えそ病 (MYSV)	—	4
いちご(親株)	1 うどんこ病	—	4
果樹全般	1 果樹カメムシ類	—	5
カンキツ	1 黒点病	並	5
	2 かいよう病	やや少	5
	3 ミカンハダニ	並	5
	4 チャノキイロアザミウマ	並	5
茶	1 炭疽病	やや少	6
	2 カンザワハダニ	やや少	6
	3 チャノコカクモンハマキ	並	6
	4 チャハマキ	並	7
	5 チャノホソガ	並	7
	6 チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	8
	7 チャノキイロアザミウマ	やや少	8
	8 クワシロカイガラムシ	並	8

※は防除情報を発表

○ 作物の生育状況（6月中旬）

早期水稲は穂ばらみ期、普通期水稲は移植前後、うんしゅうみかんは果実肥大期、茶は二番茶摘採前後であった。

○ 向こう 1 か月の気象予報

天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は高い確率 50%、降水量、日照時間はともに平年並の確率 40% と予想されている。

（1 か月予報 鹿児島地方気象台 6 月 1 8 日発表）

○ 発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 穂いもち (並)

※ 平成22年度病害虫発生予察防除情報第3号(6月25日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 6月上旬の巡回調査における発生面積率13.2%(平年17.0%)、発病株率2.0%(平年5.4%)はいずれも平年並である。
- (2) 向こう1か月の天気は、平年と同様曇りや雨の日が多いと予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期の防除を確実に行う。
- (2) 雨が続く場合、感染の危険性が高いので雨間でも防除を行う。

2 紋枯病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月上旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値:発生面積率0.9%、発病株率0.1%)
- (2) 向こう1か月の天気は、平年と同様曇りや雨の日が多いと予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 穂ばらみ期の防除が基本となるが、上位葉鞘への進展が続く場合は2回目の散布を行う。

3 斑点米カメムシ類 (並)

※ 平成22年度病害虫発生予察防除情報第3号(6月25日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 6月上旬の圃場でのすくい取り調査による発生面積率5.3%(平年15.9%)、すくい取り虫数0.1%(平年0.4%)はいずれも平年よりやや少である。
- (2) 畦畔イネ科雑草でのすくい取り調査における、ミナミアオカメムシ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ及びシラホシカメムシ4種合計虫数は3.5頭である。

[防除上の注意]

- (1) 米の上位等級確保のためには、穂揃期とその7~10日後の2回防除を厳守する。
その後も発生が見られる場合には追加防除を行う。
- (2) 出穂の早い水田には集中的に飛来する恐れがあるので注意する。
- (3) 防除効果を高めるため、一斉防除に努める。

普通期水稲

1 葉いもち (多)

※ 平成22年度病害虫発生予察防除情報第4号(6月25日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率7.5%(平年0.7%)、発病株率0.8%(平年0.0%)はいずれも平年より多である。
- (2) 6月のアメダス観測結果を基にしたBLASTAM判定によると、本病の感染好適条件が、県内各地域で複数回、散発的に発生している。
- (3) 向こう1か月の天気は、平年と同様曇りや雨の日が多いと予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 本田での初発生に注意し、初期防除を徹底する。雨が続く場合、感染の危険性が

高いので雨間に防除する。

- (2) 苗もちが発生していた場合、保菌率が高く本田で蔓延しやすいので、防除を徹底する。

2 ウンカ・ヨコバイ類 (並)

※ 平成22年度病害虫発生予察防除情報第4号(6月25日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査におけるツマグロヨコバイの発生面積率10.0%(平年7.3%)、株当たり虫数0.00頭(平年0.01頭)はいずれも平年よりやや少である。
- (2) 巡回調査におけるウンカ類については発生未確認である。
(発生面積率の平年値:セジロウンカ3.9%、ヒメトビウンカ1.6%)
- (3) トビイロウンカの飛来が、県内4か所に設置している予察灯のうち3か所(都城、国富、延岡)において、6月18日から20日にかけて確認された。

[防除上の注意]

- (1) 育苗箱施薬剤を実施したほ場では、薬効期間や発生状況を考慮して防除する。
- (2) 梅雨期に飛来成虫が著しく多く、株当たり虫数が4頭以上(セジロウンカ)になると、稲の生育が抑制されるので早めに防除する。
- (3) セジロウンカ、トビイロウンカについては、病害虫防除・肥料検査センターのホームページ等で提供する飛来状況に注意する。

3 コブノメイガ (-)

[防除上の注意]

- (1) 本県への本年度の初飛来は、6月第4半旬までは未確認であるが、防除適期は、飛来世代の次世代の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的であるので、病害虫防除・肥料検査センターのホームページ等の病害虫発生動向に注意する。

4 スクミリングカイ (多)

※ 平成22年度病害虫発生予察防除情報第4号(6月25日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率30.0%(平年12.3%)、 m^2 当たり貝数0.8頭(平年0.3頭)はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 水稻の被害は、田植え直後から3週間が著しく、その時期に深水状態ほど食害が激しいので、活着後は浅水で管理する。
- (2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を行う。
- (3) 粒剤の水面施薬に際しては、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも7日間はかけ流しや落水はしない。

野菜・工芸作物全般

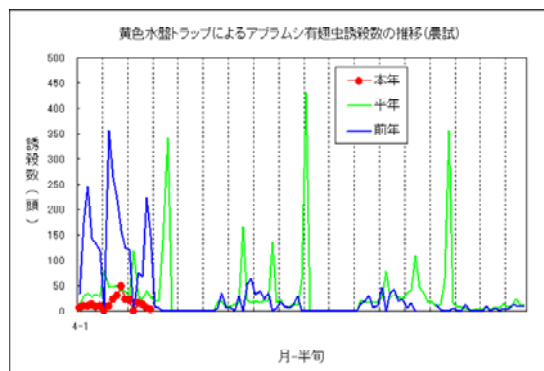
1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 黄色水盤トラップ(佐土原)による誘殺数は平年並で推移している。

[防除上の注意]

- (1) 各種のウイルス病を媒介するので、発生初期の防除に努める。



2 ハスモンヨトウ等チョウ目（鱗翅目）害虫（やや多）

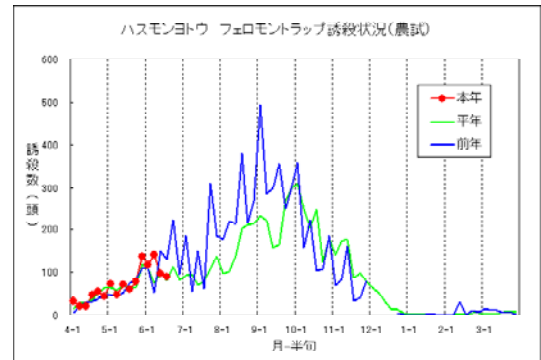
[予報の根拠]

- (1) フェロモントラップ（佐土原、都城、国富、西都）による誘殺数は平年よりやや多く推移している。

[防除上の注意]

- (1) 早期発見に努め初期防除を徹底する。

トマト



1 トマト黄化葉巻病（TYLCV）（－）

[防除上の注意]

- (1) トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミ類（タバココナジラミ、ハイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ）によって媒介されるので、発病株は見つけ次第抜根し、ほ場から持ち出し埋没処分する。
- (2) 栽培終了後は株を抜根し、10日間程度ハウスを密閉してタバココナジラミ類を死滅させ、その後残さを処分する。
- (3) ほ場周辺の雑草は、タバココナジラミ類の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場外に持ち出したトマト残さや野良生えトマト等には特に注意する。
- (4) 育苗施設の開口部は、タバココナジラミ類の侵入を防ぐために、目合いの細かい防虫ネット（0.4mm目以下）を設置し、育苗期間中は定期的に防除する。

ウリ類

1 黄化えそ病（MYSV）（－）

[防除上の注意]

- (1) 今年の2月以降、一部の地域で数例の発生が確認されている。
- (2) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬され、発生後は急激に蔓延する恐れがあることから、今後厳重な警戒が必要である。
- (3) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期的に防除するとともに、誘殺のための青色粘着板の設置や圃場周辺の除草に努める。
- (4) 本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの農林振興局・西臼杵支庁（農業改良普及センター）または病虫害防除・肥料検査センターまで連絡する。

いちご(親株)

1 うどんこ病（－）

[防除上の注意]

- (1) 6月中旬の巡回調査では、発生面積率75%、発病葉率14.1%であり、先月に引き続き発生が多い状況であり、注意が必要である。
- (2) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。
- (3) 多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- (4) 発病葉などは伝染源になるので、早めに取り除き圃場内に放置しない。

果樹全般

1 果樹カメムシ類 (一)

[予報の根拠]

- (1) 県内5カ所に設置された予察灯への誘殺数や県内3地点に設置されたフェロモントラップ調査では、ツヤアオカメムシ、チャパネアオカメムシともに平年並の飛来状況である。

[防除上の注意]

- (1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動する。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 成熟・着色の早い果実を集中加害する傾向があるので、今後モモ、ナシ等は特に注意する。

カンキツ

1 黒点病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率5.0%(平年24.0)は平年並、発病葉率0.3%(平年4.8%)は平年よりやや少である。
- (2) 向こう1か月の降水量は、平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 感染源である枯れ枝の除去に努める。
- (2) 降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算降水量300mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行う。

2 かいよう病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査における春葉調査では、発生未確認である。
(平年値：発生面積率16.4%、発病葉率1.4%)

[防除上の注意]

- (1) 発病した枝葉は、伝染源となるため可能な限り除去し、園外に持ち出し適切に処理する。
- (2) 梅雨期に予防散布する。
- (3) 風雨による枝葉の損傷を軽減するため、防風垣等を整備する。
- (4) 台風の襲来が予想される時は、事前に薬剤散布を行う。
- (5) ミカンハモグリガの被害は、格好の病原菌侵入口となるので、夏秋梢の発生の多いほ場では防除を徹底する。

3 ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率15.0%(平年24.3%)、寄生葉率0.8%(平年2.0%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%(1葉当たり虫数0.5~1頭)を目安に防除を行う。
- (2) 同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

4 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査では、発生未確認である。

(平年値：発生面積率2.9%、寄生果率0.2%)

[防除上の注意]

- (1) 5月中旬から9月上旬の間、数回防除する。
- (2) 防風垣にイヌマキが植栽されているほ場では、その新芽にも寄生するので同時に防除する。
- (3) きんかん栽培では、昨年アザミウマ類による果実の被害が発生したので、花等への寄生状況に十分注意するとともに、開花～幼果期における防除を徹底する。

茶

1 炭疽病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率5.9% (平年32.5%)、 m^2 当たり病葉数0.6葉 (平年2.0葉) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 二番茶残葉に炭疽病の発生みられる茶園では、三番茶でも多発する恐れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期に重点的に防除する。

2 カンザワハダニ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率11.8% (平年47.5%)、寄生葉率0.7% (平年7.5%) はいずれも平年より少である。

- (2) 向こう1か月の天気は、平年と同様曇りや雨の日が多いと予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

3 チャノコカクモンハマキ (並)

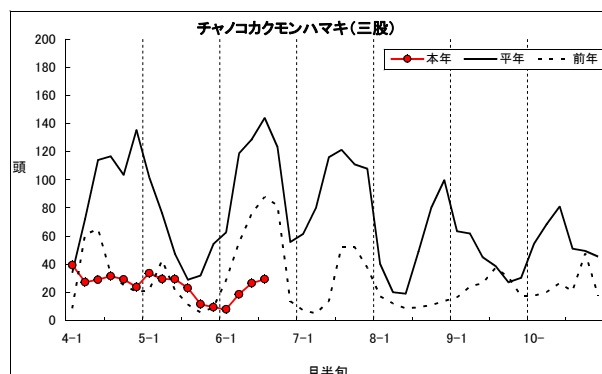
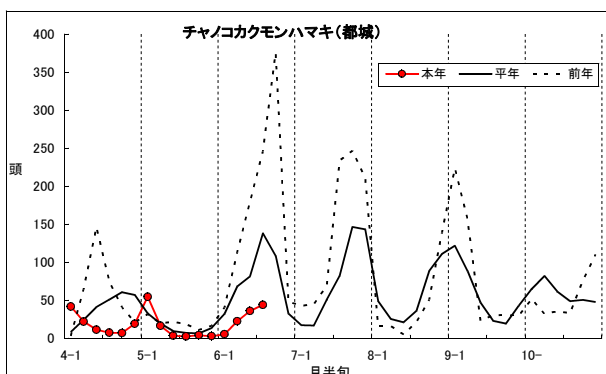
[予報の根拠]

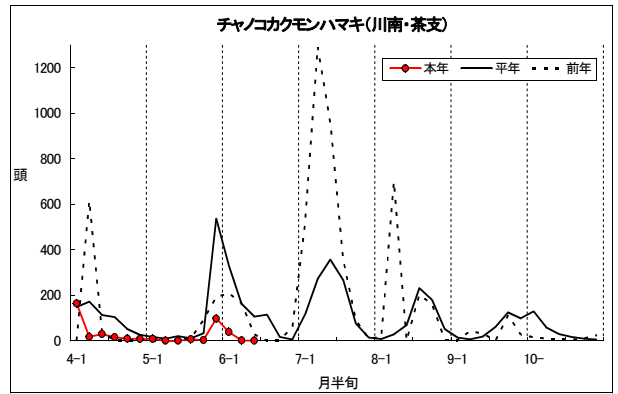
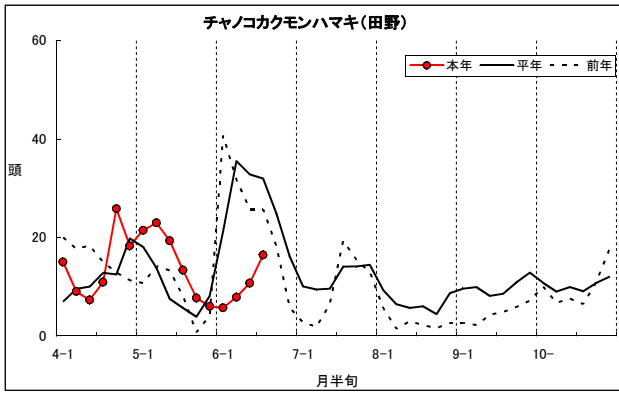
- (1) 6月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- (1) 県内4か所(都城、三股、田野、茶業支場)に設置しているフェロモントラップ調査では、発生ステージが平年よりやや遅れた状況で推移しており、次の発蛾最盛期は、6月末～7月初め頃と考えられる。

- (2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、発蛾最盛期の10日後であるが、その時期は紫外線が強く、顆粒病ウイルスの活性が低下しやすいので曇天日や夕方に散布する。





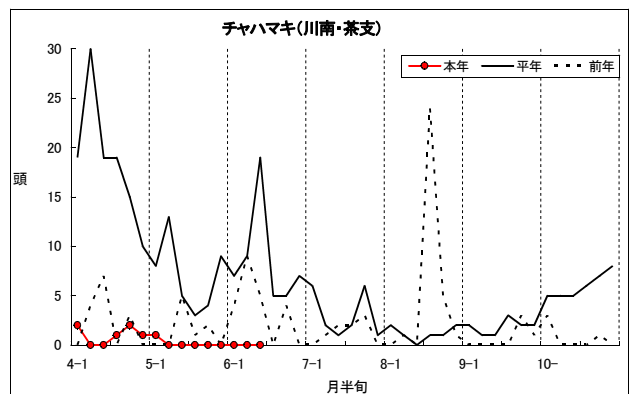
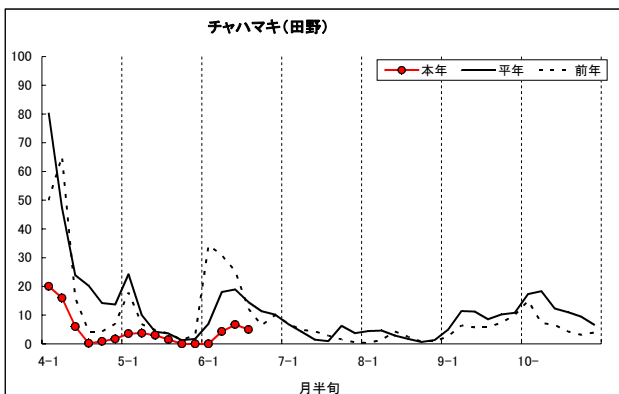
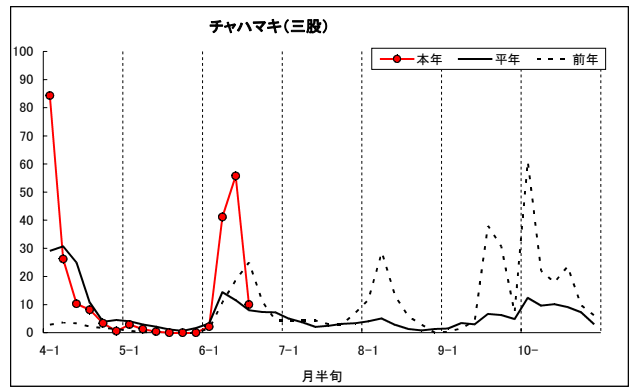
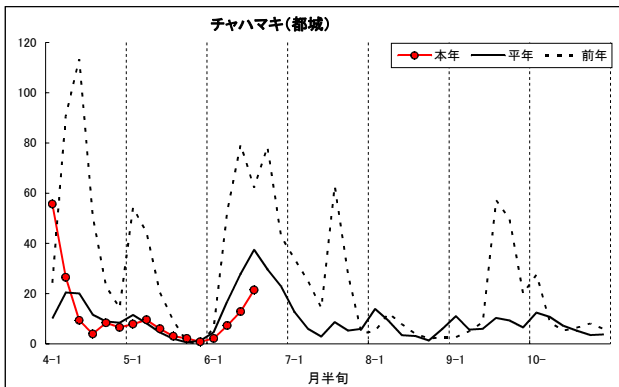
4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

(1) 6月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査による発蛾最盛期は6月中旬で、ほぼ平年並で推移している。次の発蛾最盛期は7月下旬頃と考えられる。チャノコカクモンハマキの発蛾最盛期と10日以上差がなければ同時防除する。



5 チャノホソガ (並)

[予報の根拠]

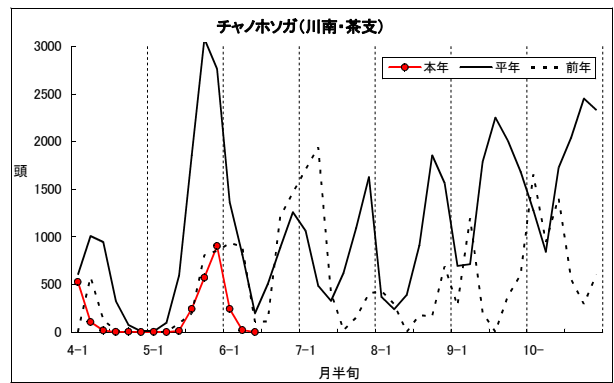
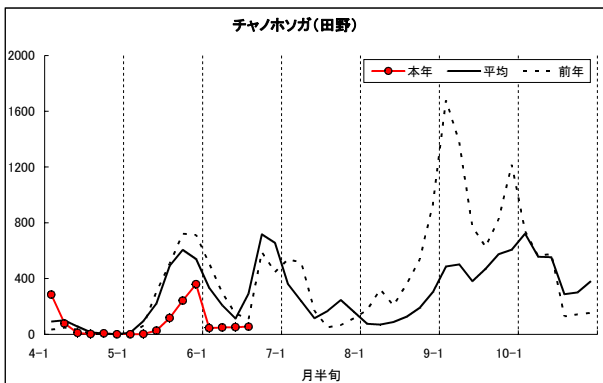
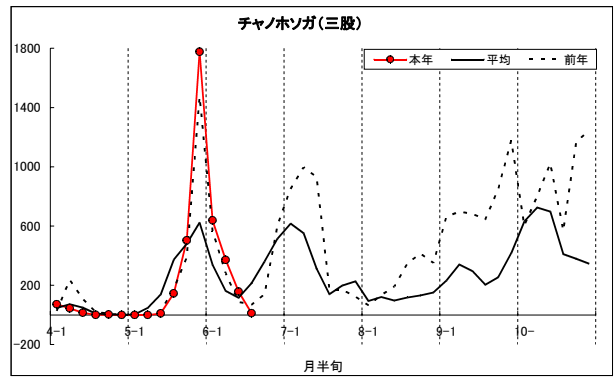
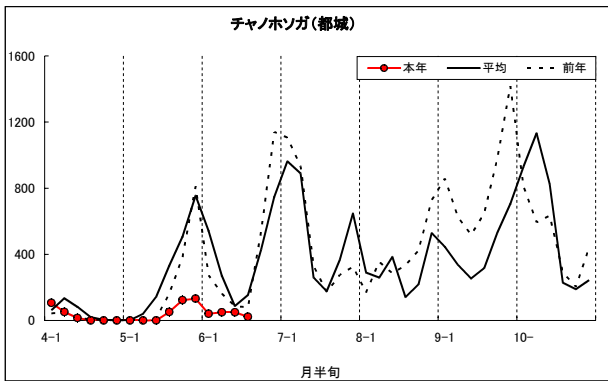
(1) 6月中旬の発生面積率11.8% (平年24.9%) は平年並、 m^2 当り巻葉数0.2葉 (平年1.1葉) は平年より少である。

(2) 県内4カ所に設置しているフェロモントラップでは、三股において5月末の誘殺数が平年より多かった。

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査による発蛾最盛期は、5月末で、次の発蛾最盛期は7月上旬頃と考えられる。三角巻葉前に防除することが必要で、発蛾最盛期の約10日後 (葉裏の表皮下でトンネル状に潜孔している時期) が防除適期である。

- (2) 脱皮阻害剤は、卵期～皮下潜葉期に散布する。
 (3) 巻葉が見られた茶園では、多発する恐れがあるので注意する。



6 チャノミドリヒメヨコバイ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の見取り調査による発生面積率64.7% (平年29.6%)、払い落とし虫数5.2頭 (平年1.8頭) はいずれも平年より多である。
 (2) 払い落とし調査による発生面積率47.1% (平年37.3%)、払い落とし虫数1.5頭 (平年1.5頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 萌芽直後から1、2葉期を重点に防除する。

7 チャノキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の見取り調査による発生面積率47.1% (平年63.5%) は平年よりやや少、寄生葉率1.9% (平年8.2%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 三番茶を摘採する園では、新芽生育初期に加害されると減収程度が大きいため、萌芽期の防除が重要である。
 (2) 深刈りなどの更新処理を行った園では、茶芽の生育期間が長く、被害を受けやすいので残効の長い薬剤で防除する。

8 クワシロカイガラムシ (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率35.3% (平年31.6%)、寄生株率9.4% (平年11.9%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は、幼虫ふ化開始から1週間後または幼虫ふ化最盛期なので、ふ化状況をよく観察して防除する。
 (2) 薬剤散布量は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、噴口を茶株の中

に差し込むなどして、枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

○ 農薬危被害防止運動

6月1日から8月31日は、農薬危被害防止運動月間です。農薬の適正使用により、事故防止に努めましょう。

○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
(旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエヒン剤は使用しないこと。

- 3 発生量(程度)の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多		(やや高	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	ない	(やや低	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	ない	(低	い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)

- 4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報……向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
(2) 注意報……主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警報……主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
(4) 特殊報……県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
(5) 防除情報……注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki> です。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499
E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp